早速中富良野村農業協同組合の施設を視察して浅野牧場三十戸で相談したが、二千円で施設出来るというので話がまとまり、上富良野村奈良ラジオ店で本機を製作し部落の人々が架線の柱を出し合つて農協の人々と協力して完成し、昭和二十四年の春五月、農協から放送を開始し、ラジオ番組の外、村内のニュースも提供したのである。

これは無電地帯からことの外よろこばれ、次々に一般化して幾寅全体に普及したのである。

こうして翌年の昭和二十五年には落合、鹿越、金山、下金山の各農協支所に親ラジオを置いて施設をしたのである。

各字に独立しているので、全村へ一箇所から放送することは出来ないが、昭和二十六年から農協の職員城丸清が技術面を担当して今日に及んでいる。

第五節　獅子舞連中

恵光寺の古文書、幾寅説教場女人講中の記録によると明治三十六年二月獅子舞連中をつくることになつたが、発起者は、寺本恵観、中屋勇次郎、富田、宇治善蔵、中島清蔵、岡下長蔵、森井、金山清吉、坂井権友と女人講中の名をつらねている。

女人講中はその頃二十名位あつて越中団体、伊勢団体市街、岐阜団体が中心だつた。寄附は五円から三円、二円、一円、三十銭、五銭等、八十数名と団体の名をつらねている。

獅子頭と道具一切の完備したのは明治三十八年であつて約三年かゝつている。金山清吉、中島清蔵の諸氏の指導で練習を重ね「幾寅のお寺の獅子」は一般の人々に親しまれ、秋の祭の風物となつたのである。

獅子舞にも流派があるが、幾寅のは各派の要素が流れ込んでおり、日本の古典芸術の能の系統もひいている。

獅子責任管理ハオ寺様トス、世話人定塚音吉、女人講代表森井ほの、神長夫人、浅野夫人。

借リル時ハ寺ノ許可ヲ得ベシ、又ハ発起者世話人ト相談シテ借リルベシ。

発起者又ハ世話人ト協議ノ上謝礼スベシ、品物ナクシタトキハ弁償スベシ。

以上の様な定めによつて運営されたので三十九年正月お寺様へ落合新山入獅子頭貸御礼、山組代表川戸長松一金十円、酒三升、スルメ二ケ、米二升という記録もあつてその頃の人情と風習がよく判る。

幾寅新山入獅子頭貸御礼、山子代表森井庄吉一金十円酒一升、肴山鳥三羽ともあつて、木材の村の昔の柚夫が百獣の王の獅子によつて山の魔を除けようとしたことが判るのである。

この明治の時代から大正へ、更に昭和三十有余年の今日までつづいているのは獅子そのものが郷土芸術として人々に愛されているからである。

第六節　弁論、趣味

昭和四、五、六年の頃弁論の全盛時代があつた。山名蕉人（林蔵）清水権録の二人が登場し、石上寿夫、石上幸夫の兄弟が頭角を現わすと、石川元春も富良野沿線大会の一位となつて各地に大会を開き、今井美之も人後に落ちなかつた。

模擬議会や擬国会が盛んとなつて石上寿夫が全道大会の二位に入選し、昭和七、八年まで盛んであつた。

昭和二十五年落合愛郷同志会が「落合新報」という謄写印刷紙（湯原英徳）が出たことがあり、北落合農事研究会の「くまざさ」（磯野宇市）は現在も出ている。

丹治正一の書道に、昭和三十年福岡吉助の会長の囲碁クラブ等落合につづいて鹿越の碁では鏑木清、杉山金市等の諸氏があるが、将棋の渡辺栄も書き加えなければならない。

鎌田晴二の会長格の義太夫連中も北海道でも有名だつた落合の三谷喜代治を師として盛んで三宅宇八、三宅タミ、篠宮トモ、岡下タツ、上床理髪店主、柴田ヒナ等の語り手を出した。

第七節　金山水石

水石の発見者は誰か、またいつ頃から注目されたかというとよく判らないが、大正七年頃に旭川市の土木事務所につとめていた広岡技手が金山の河川には変つた石があると言つて出張の度にひろつて行つたが、この人の夫人は生花の方の人で根締にしたものと思われる。

地元でも同好の士がひろい出してきて愛好していたが広く世間に紹介されたのは大正十年の頃、北海タイムス主催の管内ナンバーワン十傑人気投票に入選してからのことである。

こうして名物として世に知られるに至つた。当時旭川や札幌方面からの採取者があとを絶たなかつた。金山での愛好者は山名林蔵等であつたが、数回にわたつて盛大に水石展が開かれ、人気投票入選の人気に乗じて、旭川